

第3学年 国語科学習指導案

日 時 : 平成20年6月6日(金)第5校時
場 所 : 大垣市立西部中学校3年3組教室
学 級 : 3年3組 男子20名 女子20名
授業者 : 山 田 剛

1、単元名 心の在り方「握手」

2、指導の立場

この物語は児童養護施設の園長であったルロイ修道士とかつての園児で社会へと巣立っていった「わたし」との心の通い合いを描いている。人を愛し、人のために尽くすことを自らの喜びとしたルロイ修道士のエピソードを通して、生きることと死ぬこと、また、人と人とのつながりの温かさをしみじみと感じさせてくれる作品である。

ここでは、登場人物の人柄や心情を直接的に描くのではなく、握手や指言葉などの行動やエピソード、発言などに託して表現することの効果について考えさせたい。特に、題名にもなっている「握手」の意味は大きい。三回の「握手」に込められたそれぞれの思いと、関係の変化を的確に読み取らせたい。特に三回目の握手については「わたし」から師であるルロイ修道士に言葉では言い尽くせない感謝の気持ちや別れを悲しむ気持ちを、言葉に着目させながら読み深めていきたい。

3、生徒の実態

レディネステストの結果から、人物の行動から心情や性格をとらえることや、やま場の行動を通して、主題をとらえることはよくできている。ただし、これらの問題に関しては、4つの選択肢から選ぶ問題であるため、比較的答えやすかったと考えられる。また、主題をとらえるために重要な場面の転換部分をとらえる問題も、ほとんどの子ができていた。この問題は、選択問題ではなかったが、文章中から限定された字数で探して書けばよいため答えやすかったと考えられる。

ところが、人物の言動の移り変わりから心情の変化をとらえる問題では、表現を根拠に心情を探ることができたのが全体の3分の2であった。残り3分の1の生徒は、手がかりになるであろう文章に目をつけることができているが、そこから心情を探ることをあきらめてしまったり、はじめから何も書かなかったりしている。つまり、主体的に読み深めようとする意欲に欠ける姿とも言える。

これは「読むこと」教材におけるこれまでの授業の中でも見られた傾向で、心情を探るための手がかりは文中にあるのに、本文に立ち返らずに読み取りを進めてしまったり、手がかりが見つからない時点で読み取することをやめてしまう姿があった。

ある程度の手がかりが与えられれば正確な心情の把握ができるという実態もふまえて、心情を読み深めていくことが苦手な生徒には、キーワードとなる言葉を提示したりしながら、表現に着目して読み進めていく力をつけていきたい。

4、研究との関わり

大垣市中学校国語部会の研究テーマ

明日に生きる言語能力の育成

言葉の感性が育ち、学びがいのある国語教育の育成

この研究テーマの達成に向けて、本校の国語科では読み取りの根拠を明らかにするための表現に着目して読み進めることを大切にして実践を進めてきた。また、そのような学び方の定着を図るために、全校体制で「確かな学力を育てる教科指導のあり方」をテーマに研究を進めてきた。その中で大切にしてきたのが、次の2点の研究内容である

研究内容(1)「目標と指導と評価の一体化」を図った指導について

従前の読むことの指導においては、文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであったことが指摘されている。そこで、本単元においては、場面ごとに主人公の心情の変化を読み進めていくのではなく、目的や意図を明確にした「読むこと」の指導を試みた。

本時においても、「三回の握手」に込められたわたしとルロイ修道士の心情を読み深めていく活動を位置づけ、作品全体から主題に迫れるようにする。

また、机列表にレディネステストをもとにした生徒の実態を記入し、さらに毎時間の生徒の『学びの実態』を書き込みながら、一人一人に応じた具体的な指導援助を行う。特に、前時書きまとめが[C]の生徒に対しては、机間指導の中で、「キーワード」(『しっかりと握った』『それでも足りずに』など)をもとに、自分の考えが書き込めるよう指導援助を行っていきたいと考える。

研究内容(2)「学び合う力」を育む指導について

「学び合う」ためには、一人一人が自分の考えを持ったうえで、それについて仲間と交流をする必然性を持つことが大切である。そのために、まず、「課題」に対して自分の読みを持つ時間を確保する。自分の読みが書けていない生徒には、机間指導の中で主人公の心情を心内語で書くよう働きかけを行ったり、「キーワード」となる言葉から考えられるようにしたりして、すべての生徒に自分の読みが書き込めるようにする。

さらに、全体での交流会では、自分の考えを発表するだけにとどまらず、仲間との発言をつなげたり、言葉と言葉を関連づけたりして話し合いができるようにする。さらに教師が意図的に「練り合い深め合い」ができる「収束の発問」を「深める段階」の後半に位置づける。「別れの握手」に込められた「わたし」の心情を『『出会いの時の握手』とどんな違いがあるだろうか』といった「収束の発問」を位置づけ、本時のねらいに迫っていきたいと考えた。このことは、すべての生徒が「本時のねらい」に迫るために仲間との交流を踏まえた上で自分の確かな読みを確立するために有効であると考えたからである。

5、単元目標

作品に表された作者の思いや登場人物の心情を読み取り、人の生き方について考えることができる。